

女医嫌いの女医

これからの時代、医療界を支える真の立役者は、医師不足の中でも右肩上がりに増え続けている「女医」であろう。

昨年度（第一〇五回）の医師国家試験における本学の合格者数は九六人であったが、うち三三人が女性であった。合格者全体の内訳をみても、「三人に一人」が女医という時代にどんどん近づいている。私の卒業した一八年前は「五人に一人」であったことを考えると、女医の比率は増加の一途をたどっている。

これからは覇気をなくした男性に代わって、元気で意欲的な女医が現場を仕切る時代がくるかもしれない。もちろん、そうした現象に対して、「男女雇用機会均等法」や「男女共同参画社会基本法」の効用である」と喜ぶ声もあろう。しかし、誤解を恐れずに言うならば、それは医療界を席卷し、脅かすものになるかもしれない。

実際の医療現場において、最近の女医はどのように立ち振る舞っているのか。それは、一言で言えば「迷っている」ということである。時代とともに変遷していった女医像について総括し、男性医師の視点から若干憂慮されることと今後の女医の発展性について、私見を述べる。

ひと昔前まで女性は、仕事も恋愛も家庭も子育ても、すなわち、社会人、女性、妻、母親を手くこなして、やっと一人前の「働く女性」と認められる傾向にあったのではなからうか。

男は高学歴でも些細なことで道を踏み外したり、他人からみればたいして役に立ちそうもない仕事をこたわってやっていたりする。それでも、やっていける風土があったからである。

しかし、女性で一目置かれるには、誰の目から見ても分かりやすい、「真つ当な」仕事に就く必要があった。「女性も手に職を、資格を」ということで、子供の頃から努力を重ねてきた彼女たちは、「就職か、パートか、バイトか、バイトか、進学か、家事手伝いか」という選択肢の中で、迷わず真剣に働く道を志してきた。

親元を離れられない成績の良い女子学生は、親や親類、教師の薦めも手伝い、地元でもっとも優秀な大学の優秀な学部で照準を合わせ、一八歳かそこらでまさに雲を掴むように医師を目指した。

手を抜くということを知らず、「正攻法による正面突破でアイデンティティを確立する」という「ある意味では不幸とも言える幸せな道」を歩んできてしまった。だから、医学部に入学した女子たちは、まず例外なく真面目である。

そんな中で医師になることを自己決定した女性は、旺盛なやる気のみせたが、同時に独自性の

高い色彩豊かな方々でもあった。男中心の職場で働くには「前向き潑刺マインド」が必要であり、そのほとんどが、信頼性と快活性の高い「姐御」タイプの女性たちであった。

まさに女医は男勝りに働いていた。しかし、その後、時代は狂乱の医師不足へと突入した。

社会進出を果たしたものの、女医たちは徐々にサクセスを追いかけることに疲れ始めた。理想としていた仕事や目標としていたキャリアに到達することは、男女を問わず医療界では結構な至難の業である。そのことに気付き、現実には直面した女医たちは、ストレスと疲労とで失速していった。

彼女たちの望んだ「自分の生き方のすべてを自分で決定できる」「権利」には、「自分の生き方すべてを自分で決定しなければならない」という重苦しい「責任」が伴っていたし、「自己決定・自己責任」という理念は、それを貫こうとする個人にとってどれ程の心身錬磨を要求するのか。その心理的負荷に耐えるには、どれ程の精神力と肉体的な強さが医療現場では求められるのか。そういった命題を軽視していた。

そもそも女医は母性本能から小児科や産婦人科に進む人が多かった。言うまでもないが、最も過酷な診療科こそ、この二つであった。そしてある意味不幸なことに、女医の多いこれらの診療科において、真つ先に医師不足の悲鳴が上がったのである。

私が医師になった時代には、女医の働きやすい環境などというものは、まったく整備されていなかった。その中で上手く立ち回るとは極めて困難であったであろうが、敢えてシニカルな言い方をするならば、彼女たちは不満を抱えつつも、結婚や妊娠、出産を契機に、厳しい医療現場から撤退する決意を得ることができた。かつての女医は、職場の環境の劣悪さを理由に、スキルアップの呪縛から逃れることができたのである。

そんな中で医療界においては、（私の感覚では）五年ほど前から、ようやくジェンダーに関する議論が始まり、男性の協力を得ることで、仕事と生活との調和に対する「ワークライフ・バランス」が重視されるようになってきた。これにより、職場が厳しい現場であるか否かに関わらず、自分が望む「女医ライフ」を主張するうえで、の金科玉条を手に入れたのである。

その結果、多くの女医の理想とする医師像は、「医療現場の前線に立つて、学会でも質の高い発表ができて、恋愛でも成功し、理解のある夫と賢い子供とに恵まれ、素敵な一戸建てを構え、センスが良く、プロポーションを維持し、芸術や文化に造詣を深め、海外にも友人ができる」という大いなる野望へと変化を遂げた。

そのためには、時間を捻出しながらファッションやメイクをチェックして、シヨッピングやビューティーサロンに通い、どこのレストランのスイーツがデリシヤスカを知り、ワインに精通し、アートに触れることで教養を身に付け、スポーツやジムでストレスを発散させ、エステやネ

イルに凝ることによって女性を自覚する（したいと願う）ようになった。

しかし、ここでもまた、ひとつの問題が浮上した。分かりやすく言うならば、女医同士における、「男女平等を求め声」と「女性としての権利を求め声」との衝突による混乱であった。つまり、バリバリ働きたい女医と、仕事はそこそこにプライベートや家庭を重視したいという女医との摩擦であった。

それは、そうであろう。一旗揚げるまで頑張ろうとする女医と、夫や彼氏を支えられながら趣味程度に医師をやるうとする女医とで、価値観の相違が生じないはずがない。

多くの女性はいつか好きな人と結婚して休職し、子供を産み育てたいと考え、「それまでは何とか頑張ろう」と思っている。もちろん、そうした考えはごく普通のことである。しかし、そうした「当たり前を主張する女医」と、「当たり前を犠牲にしようとしている女医」との間のパラダイムに亀裂が生まれ、対立してきたのである。

医療現場では、女医のロールモデルの開拓が早急に求められているが、まったく上手くいかない。男性から見れば、「女性同士なのだから、女医たちで一致団結して、お互いを補い合えばいいではないか」と思うが、そんな統制はまず取れない。男は単純で、仕事を愚直にこなす人間が多いが、女医は男性医師以上に考え方が多様で、結束の取りにくい集団なのである。